

葬制と社会変動に関する研究動向 —2010年代以降の葬制変容論を中心に—

大場 あや

はじめに

近年、葬制・墓制に関する研究成果が相次いで提出されている。とりわけ2010年代以降、葬祭市場の大規模化および葬送儀礼の商品化を活写する成果が相次いでいる。人口動態（少子高齢化）や家族変動（単身化）と連動した新たな変化を視野に入れた研究が着手され、さらには、昨今の新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、ICTを葬儀に活用するケースも出現し、その動向に注目が集まっている。めまぐるしく変貌を遂げてきた葬儀習俗について、2010年頃から戦後の変容を総括する試みが見られる。しかし、その「変容論」は未だ共通見解が得られているとは言い難い。そこにはどのような原因があるのだろうか。

本稿では、葬制に関する網羅的な研究史を作成し、当該研究領域の底上げを図った山田慎也による研究史レビューを参照しながら、葬制研究の歴史を改めて確認したい。また、山田のレビュー論文以降に提出された近年の成果を補う形で葬制研究の現状を俯瞰することを試みる。さらに、代表的な先行研究者による葬制変容論をレビューした後、今後の葬制研究の課題と可能性を展望してみたい。

第1節 葬制に関する研究史——山田慎也によるレビューから

(1) 祖型の追求

日本民俗学において、葬制研究の嚆矢となったのは、柳田国男の「葬制の沿革について」である。柳田は、「通例何れの民族でも是が最も主要なる文化の一特徴と目せられて居る」〔柳田2001（1929）：95〕と語ったが、以降、葬制・墓制は重要な研究対象と目されるようになる。山田慎也は、柳田を起点に、①戦後の井之口章次、最上孝敬、土井卓治、佐藤米司、五来重らによる儀礼や霊魂観、両墓制の研究、②竹田聴洲、桜井徳太郎、伊藤幹治、R.J.スミスらによる祖先祭祀と家に関する研究、③1970年代後半に相次いで刊行された民俗誌ないし研究集成、④都道府県史・市町村史の民俗編、各大学や地方学会等による各地の民俗の報告、⑤文化庁が主導した各都道府県における大規模一斉調査（「民俗資料緊急調査」、1962年より3年間）の成果を渉猟し、葬制に関する研究の流れをまとめている〔山田2007：15-22〕。

山田は、1970年代以前の葬制研究については、個々の儀礼を項目ごとに集成し、それぞれの意味や「祖型」、地域的分布を検討することに重点が置かれており、地域ごとのコンテキストはあまり考慮されてこなかったとコメントしている〔山田2007：19〕。

(2) 地域社会と葬制の変容

1980年代以降、都市化ないし高度経済成長による社会構造の変化と葬制の関係を扱った研究が提出されるようになる。民俗学の問題関心は、基層文化の残存と比定される伝統的な葬

送儀礼の記録にあったため、その変容は「伝統の崩壊」として関心の対象となりにくかった [山田2007:22]。一方、葬制の変容に関しては、文化人類学や社会学、宗教学など関連分野が先導する形で研究が進んだ。山田は、中牧弘允、村上興匡、嶋根克己による成果をレビューしている [中牧1984] [村上1990、1991 a、1991 b、1991 c など] [嶋根2001]。なかでも村上興匡による一連の研究（大正期東京および戦後群馬県農村における葬儀の変化）に注目し、重要な先行研究と評している。ただし、都市化による地域社会の解体を葬制の変容の要因として捉えようとする従来の理解に対し、山田は、和歌山県古座町の事例から、地域住民が地域社会の紐帯の強固さを背景に葬祭業者の利用や新しい儀礼様式（儀礼の形態変化・式場の変化・供養の簡略化等）を主体的に選択していく過程を描いている [山田1995:47、2007]¹。

(3) 葬祭業の展開

次いで山田は、葬制の変容において大きな役割を果たした葬祭業者を扱った研究を取り上げている。葬祭業者を正面から対象化した山田自身の研究を中心に、田中大介、鈴木光による成果、その他、関連業者ら現場サイドからの報告をレビューしている [山田1996、1999、2007] [Suzuki 2001] [田中2004] [葬送文化研究会編1993]。

山田は、「白木祭壇」の成立とその機能の変化を論じ [山田1996]、地方の葬祭業者の展開過程をトレースしている [山田1999]。山田は、葬祭業が、①個々の業務を積み重ねて次第に葬儀全体を請け負うようになったこと、②地域社会を基盤に業務展開していること、③葬儀に関する知識の正統性を誇示するようになったこと、④死生観のレベルにまで影響が深く及ぶようになったことを指摘している [山田2007:318-321]。

第2節 葬制研究史の補充と更新

以下では、[山田2006、2007] では扱われていない成果、並びに2007年以降の研究成果を補う形で葬制研究史の更新を図りたい。

山田の研究史において言及されていない村上興匡の研究に、次のものが挙げられる。村上興匡は、葬祭業者および互助会の全国的組合である全日本葬祭業協同組合連合会（「全葬連」）と社団法人全日本冠婚葬祭互助協会（「全互協」）の年史を分析し、戦後の全国的な葬儀の変容を葬祭業者の側から捉え返した [村上2006]。そこでは、戦後の葬祭業の展開について、①新生活運動の果たした役割が大きかったこと、②互助会の成長、他業種の参入が見られた昭和45年～50年の5年間で重要な転機となったこと、③葬祭業者の側が「葬儀の公共性」や「葬儀文化の担い手」について積極的に発言したこと、という3点が指摘されている [村上2006:19]。

次に、2010年代以降に提出された主要な成果を追っていく。田中大介は、文化人類学における葬儀・葬儀業研究、およびデス・スタディーズなどを踏まえ、現代の「葬儀業」が果たす役割を論じている。葬儀社での参与観察を踏まえ、供給—消費の双方向的な関係における文化実践の担い手としての葬儀業者の姿を活写している [田中2017]。

また、川嶋麗華は、葬祭業者の関与を「葬具の提供」（道具）、「葬祭サービスの提供」（手間）、「葬儀場の提供」（場所）の3段階に区分し、真宗門徒地域である広島県北広島町の農村と町場の事例から葬儀の動態把握を試みている [川嶋2017:60]。1973（昭和48）年頃から利用が見られ始めた公営火葬場と葬祭業者の受容過程（何をどこまで利用するかという取

捨選択)は、葬儀の担い手組織である「講」ごとに異なることが指摘されている〔川嶋2018 a : 276-277〕。

玉川貴子は、葬祭業者が「商品化」を拡大させる一方、批判の声に直面する中で、自らをどのように正当化し、対処しようとしてきたのかという「葛藤の歴史」を業者側の視点から描き出している〔玉川2018〕。葬儀の商品化と遺体に対する忌避感やタブーの稀薄化、そして葬祭業者への蔑視の稀薄化という意識の変化にも論及している〔玉川2018 : 66-77〕。

以上、山田による研究史レビューを参照軸に葬制研究を概観してきたが、2010年代以降も田中大介、川嶋麗華、玉川貴子らを筆頭に成果が相次いで提出されている。とりわけ2010年1月31日～2011年2月11日にかけて放映されたNHKスペシャルの「無縁社会」シリーズ以降は、孤立死や貧困、引き取り手のない遺体・遺骨などの問題に関心が高まった〔鈴木・森編2018〕〔国立歴史民俗博物館編2018〕。なお、海外との比較研究ないし他国の研究者との共同研究も提出されている〔Suzuki ed. 2013〕〔国立歴史民俗博物館・山田・鈴木編2014〕。

第3節 代表的な葬制変容論のレビュー

個別事例や全国的な民俗収集の蓄積を受け、2000年代以降、戦後の葬制の変容を墓制とともに概括する論考ないし共同研究の報告が見られるようになった。以下では、2010年代に総括されることになった代表的な論者による「葬制変容論」を確認し、冒頭で触れた課題について考察したい。

(1) 村上興匡：中心儀礼・実働補助・葬法の変化と「2つの個人化」

村上は、「戦後の葬儀慣習の変化としては、①中心儀礼の変化：葬列から告別式、②葬儀実働補助の変化：葬式組から葬儀社、③葬法の変化：土葬から火葬、の3点が並行する形で、全国的に進行してきた」と指摘する。これらの変化は、「都市的な生活様式の普及」に伴うものであり、「葬儀の性格、意味づけは、従来の地域を中心に「送り出し」を行う共同体的なものから、家や家族を中心とした「弔問を受ける」個人的な儀礼へと変化した」と論じている〔村上2003 : 362〕²。これら1970年代以降に生じた、「地域の儀礼」から「家／家族の儀礼」へという変化を「第一の個人化」と呼んでいる。そこでは、「死者の公共的性格が失われ、近親の死は隠すべき私的なものへと変化した」とされる〔村上2018 : 137-138〕。さらに1990年代以降、主に都市部における新たな動き（継承者不要の墓地、散骨を行う「自然葬」、エンディングノートをはじめとするウィルバンク（遺言銀行）など）を「第二の個人化」（葬儀を「最後の自己表現」と見る新しい傾向）と捉えている〔村上2018 : 139〕。

(2) 森謙二：葬法の近代化と葬祭業者の登場、「2つの近代化」

森は、「土葬から火葬へ」という展開を「葬法の近代化」と位置づけている〔森2000 : 175-176〕。近親者や近隣集団の手助けによって行われていた「葬送儀礼の多くの領域が商品交換市場のなかに組み込まれる」。つまり「葬儀業者の登場と地域共同体（近隣集団）の葬儀からの撤退はパラレル」な関係にあると述べている〔森2000 : 181-183〕。森は、土葬から火葬への移行とともに葬送領域の市場化が進展した流れを「葬送の「第一の近代化」と呼ぶ〔森2014 : 104-109〕。さらに1990年代以降、地域社会の崩壊、「日本型近代家族」の解体を受け、「葬送領域の商品化・市場化の拡大」が進み、「葬送領域のパラダイム変化」が起こっ

たと論じている。これを「第二の近代化」と呼んでいる [森2014:124-125]。

(3) 嶋根克己・玉川貴子：地域共同体から葬祭業者へ、死を取り巻く条件の変化

嶋根と玉川は、「都市的生活様式の拡大、地域共同体関係の希薄化、核家族化と家族の縮小、少子高齢化」を念頭に「葬送儀礼の役務を提供する主体が、共同体から葬祭業者へと移行」し、「あらたなサービス産業の領域」を作りだした点に注目する [嶋根・玉川2011:103] また、「伝統的葬儀」と「現代的葬儀」における死と葬儀を取り巻く状況として、①死亡場所（自宅から病院へ）、②埋葬方法（土葬から火葬へ）、③葬儀会場（自宅から会館へ）の3点において大きな変化が生じたと論じている [嶋根・玉川2011:93]。

(4) 新谷尚紀：血縁→地縁→無縁へ

新谷は、1990年代より葬儀執行主体の類型とその変遷を論じている。葬儀の執行に関わる立場を「A：血縁の関係者」（遺族・親族）、「B：地縁の関係者」（葬式組や講中）、「C：無縁の関係者」（僧侶などの職能者）の3つに区分している [新谷1991]。そして、「近世社会における近隣組織の発達と相互扶助の慣行の浸透により、葬儀執行の主体が血縁から地縁へという一大変化が日本列島で波状的におこったのではないかと推論する [新谷1998]。また、前掲の全国調査 [国立歴史民俗博物館1999、2000] の追跡調査として行われた共同研究では、A、Bそれぞれが中心的に関わる事例とその中間的な事例の計6例を詳細に分析している。柳田国男が提唱した重出立証法（比較研究法）の実践を試みる立場から、古代・中世の資料にも目配りしつつ、上記6例から「A血縁→B地縁→C無縁」という担い手の3波展開（変遷史）を読み取ろうとしている [新谷2015:53-136]³。

(5) 関沢まゆみ：土葬から火葬へ、葬儀社とホール葬へ

関沢は、前掲の全国調査 [国立歴史民俗博物館1999、2000] のデータを駆使し、1960～1990年代における葬儀の変容を論じている [関沢2002]。新谷が提出した上述の葬儀執行に関わる立場の3分類を用いながら、葬儀の各要素における担い手の変化を分析した（58例）。その結果、1960年代は、湯灌・入棺はA、葬具作りはB、死装束作りはAまたはBとする役割分担が一般的であったが、1990年代には、湯灌・入棺はA→C（病院・葬儀社）、葬具作りはB→C（葬儀社）、死装束作りはAまたはB→C（葬儀社）という急激な変化が見られたことを指摘した。遺体処理に関してもC（葬儀社・火葬場職員）への変化が見られる。このようなCの進出、すなわち「経済外的関係」から「経済的關係」への移行を「葬儀の商品化」の進行と捉えている [関沢2002:204-206]。

また関沢は、同全国調査の追跡調査 [国立歴史民俗博物館編2015] をもとに、1960年代から2010年代までの約50年間における葬送墓制の変化を分析している。「その変化の特徴としてまずは、火葬の普及の徹底と、ホール葬の普及、に集約することができる。それが、旧来の家族・親族、近隣の相互扶助による葬儀を大きく変えた。「土葬から火葬へ、葬儀社とホール葬へ、という変化によって、近世の村請制以来継承されてきていた近隣による葬儀の手伝いという方式も終わりの時期を迎えているのである」 [関沢編2017:2-3]。

(6) 鈴木岩弓：土葬から火葬へ、契約講から葬儀社へ

鈴木は、「死の儀礼」の構造について論じる中で、葬儀の担い手の変化に言及している。「日本の伝統社会において、死者の面倒をみる担い手は、主にイエ・地縁・親族・僧侶・知人であった」が、「土葬から火葬へと遺体処理の方法に変化が出てきたのと、時期的にはほぼ同じ」頃に「葬送専門業者による葬儀への関わり」が始まったという〔鈴木2018:159-160〕。鈴木は、東日本大震災後の宮城県において土葬が「復活」した事例を報告しているが、そこでは、「1980年代後半の宮城県は、一方で「土葬から火葬」への葬法の変化が顕著になり、他方で葬儀の担い手が「契約講から葬儀社」に移っていく変動期」だったと述べている〔鈴木2012:103〕。

第4節 研究上の課題

(1) 葬制変容の捉え方について

以上の各論者の「葬制変容論」を概観すると、立場や論点の違いはあるが、①葬法の変化（土葬から火葬へ）、②葬儀の執行主体ないし実働補助の変化（地域の互助組織から葬送業者へ）、③葬儀場所の変化（寺院・自宅から葬祭ホールへ）という3つの変化が共通して指摘されていることがわかる。その他、儀礼の構造や意味づけ、死生観の変化を論じたものもある。上記の諸変化は1960年代以降とする論者が多い一方、1970年代という見解もあれば、宮城県は1980年代後半だとする記述もあり、一定していない。家族形態の変化に着目する論者は1990年代を一つの画期と見ている。また、2010年代に至るまでの50年間を捉える論者もいれば、古代・中世からも視野に入れた近世から現代までのより長いタイムスパンで変遷を論じようとする論者もいる。「近代化」や「個人化」、「私事化」、「商品化」など、変容を分析する概念も論者によって異なっている。加えて、それぞれの変化は「パラレルに」「全国的に進行してきた」とする論者もいれば、併記するだけに留まるものもあり、それらがどのように関連しながら進行したのか、具体的な影響関係が見えづらい。つまり、各地域に共通する変容の要因を俯瞰すれば、上記①～③といった共通項を抽出することが可能だが、どの変化が最もインパクトを与え、各変化は相互にどのような関係にあるのか、これらの問いに応えられる研究は少ない。今後、時代や地域ごとの差異に留意しながら変容を及ぼした力学を精査していく必要があると考える。

(2) 葬儀の担い手の変容図式

上記②「葬儀の執行主体ないし実働補助の変化」に焦点を絞る形でさらに議論を進めたい。木下光生は、近世大阪の葬具業者と地域の葬送の例を挙げながら「伝統から商品化へ、あるいは互助から業者へ、という単線的・二項対立的な見方」ではなく、複眼的な視点が必要だと論じている〔木下2012:200-202〕。近世と近代で対象とする時代は異なるが、葬制変容における二項対立図式の捉え直しが喚起されていることを指摘しておきたい。

単線的な理解を避け、地域社会と葬祭業者の双方の視点から葬制の変容を捉えようとする視点は不可欠である。なお、筆者が調査を進める山形県最上郡最上町においては、葬祭業者の参入による影響は副次的であり、重油式火葬場の建設やそれを推進した住民の主体的な言論活動、まちづくりの流れを捉えた新生活運動への積極的な取り組みこそが変化の重要な触媒となっていた〔大場2021 a、2021 b〕。事例によっては、葬祭業者の参入による影響をエ

ポケーし、新生活運動をはじめとする政府・行政主導の諸政策の影響や地域社会の近代化（農地解放・民主化・衛生化・学校化）を総合的に視野に入れながら、市場化・商品化のインパクトとそれに至るまでの段階をより正確に記述する作業が必要であろう。

そのためには、葬制の土台となる地域社会についての十全な理解が不可欠となる。先行研究を俯瞰すると、前提となる地域社会の押さえ方が論者によって大きく異なっている。研究フィールドは、農村や漁村もあれば、都市や都市近郊農村もあり、地域特性があまり意識されていない研究も散見される。葬儀の互助に関しても、葬式組のような住民組織が中心のものもあれば、組織形態を取らず個々の家相互ないし一方向的な互助関係が中心となっている事例もある。今後は、農村社会学・農業経済史など様々な領域の知見を取り入れながら、地域特性や社会組織・関係のあり方を共有することで、共通の議論の土台を設定することが重要だと考える。こうした観点から「葬制変容論」を整理することは、関連分野との対話を容易にし、国際的な比較研究の可能性も拓くことに繋がるであろう。

注

- 1 こうした流れと並行して、高度経済成長による民俗の変化に注目した大規模な調査研究も実施された。国立歴史民俗博物館は、各都道府県につき1～2地域における1960年代と1990年代の葬制を調査し、その変化を分析している〔国立歴史民俗博物館1999、2000〕。同調査の報告を兼ねたフォーラムの記録集が『葬儀と墓の現在』〔国立歴史民俗博物館編2002〕、追跡調査の報告が『国立歴史民俗博物館研究報告』191号〔国立歴史民俗博物館編2015〕である。ただし、調査者によって関心の所在が異なるため地域間の比較が難しいとの指摘もある〔林2010：16〕。その他、火葬の受容やその変容に着目した研究も近年提出されている〔林2010〕〔関沢2015〕〔川嶋2018a、2018b、2021〕。
- 2 また、葬儀の「私事化」により、社会儀礼としての葬儀の拘束力が弱まりつつあることを各種アンケート調査から指摘している〔村上2003：346-342〕。
- 3 ただし、この方法論の妥当性については共同研究チーム内でも今後の課題とされている〔国立歴史民俗博物館編2015：4〕。その他、「同族」の理解とそれに伴うA中心かB中心かという類型判断に関する疑問は、拙稿〔大場2016〕において詳しく論じた。

参考文献一覧

- 大場あや2016「書評と紹介 新谷尚紀著『葬式は誰がするのか：葬儀の変遷史』」『宗教学年報』31、85-96頁。
- 大場あや2021a「地域社会における葬儀変容の力学——山形県最上町契約講連合会のモノグラフ——」『宗教研究』95（1）、75-99頁。
- 大場あや2021b「新生活運動と「冠婚葬祭の簡素化」——広報にみる地域住民の論理と「共同化」への動き——」『宗教と社会』27、17-31頁。
- 川嶋麗華2017「真宗門徒の村の葬儀の継承と変化——二〇一六年四月の現地調査とその事例分析から見えてくること——」『國學院雑誌』118（2）、59-87頁。
- 川嶋麗華2018a「野焼きの伝承と火葬炉の普及——併行した2つの技術——」『国立歴史民俗博物館研究報告』207、281-306頁。
- 川嶋麗華2018b「ヤキバを残した村——高度経済成長と地域社会の対応——」『国立歴史民俗博物館研究報告』207、253-279頁。
- 川嶋麗華2021『ノヤキの伝承と変遷——近現代における火葬の民俗学的研究——』岩田書院。
- 木下光生2012「近世の葬送と墓制」勝田至編『日本葬制史』吉川弘文館、180-246頁。
- 国立歴史民俗博物館1999『死・葬送・墓制資料集成』東日本編1・2、国立歴史民俗博物館。

- 国立歴史民俗博物館2000『死・葬送・墓制資料集成』西日本編1・2、国立歴史民俗博物館。
- 国立歴史民俗博物館編2002『葬儀と墓の現在——民俗の変容——』吉川弘文館。
- 国立歴史民俗博物館編2015『国立歴史民俗博物館研究報告』191、国立歴史民俗博物館。
- 国立歴史民俗博物館編2018『歴博』206、国立歴史民俗博物館。
- 国立歴史民俗博物館・山田慎也・鈴木岩弓編2014『変容する死の文化——現代東アジアの葬送と墓制——』東京大学出版会。
- 嶋根克己2001「近代化と葬儀の変化」副田義也編『死の社会学』岩波書店、267-287頁。
- 嶋根克己・玉川貴子2011「戦後日本における葬儀と葬祭業の展開」『専修人間科学論集』1(2)、社会学篇第1号、93-105頁。
- 新谷尚紀1991『両墓制と他界観』吉川弘文館。
- 新谷尚紀1998「死と葬送」赤田光男・福田アジオ編『講座日本の民俗学6 時間の民俗』雄山閣、257-270頁。
- 新谷尚紀2015『葬式は誰がするのか——葬儀の変遷史——』吉川弘文館。
- 鈴木岩弓2012「東日本大震災にみる土葬の復活——“あり得べき”死者の姿——」大稔哲也・島蘭進編『死者の追悼と文明の岐路——2011年のエジプトと日本——』三元社、94-106頁。
- 鈴木岩弓2018「死者を忘れない——“死者の記憶”保持のメカニズム——」鈴木岩弓・森謙二編『現代日本の葬送と墓制——イエ亡き時代の死者のゆくえ——』吉川弘文館、150-168頁。
- Suzuki, Hikaru, 2001, *The Price of Death: The Funeral Industry in Contemporary Japan*, Stanford University Press.
- Suzuki, Hikaru, ed., 2013, *DEATH AND DYING IN CONTEMPORARY JAPAN*, Routledge.
- 関沢まゆみ2002「葬送儀礼の変化——その意味するもの——」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在——民俗の変容——』吉川弘文館、201-226頁。
- 関沢まゆみ2015「火葬化とその意味——「遺骸葬」と「遺骨葬」：納骨施設の必須化——」国立歴史民俗博物館編2015『国立歴史民俗博物館研究報告』191、91-136頁。
- 関沢まゆみ編2017『民俗学が読み解く 葬儀と墓の変化』朝倉書店。
- 葬送文化研究会編1993『葬送文化論』古今書院。
- 田中大介2004「葬儀産業研究の可能性——社会的傾向としての「死ぬこと」の把握を目指して——」『死生学研究』3、306-323頁。
- 田中大介2017『葬儀業のエスノグラフィ』東京大学出版会。
- 玉川貴子2018『葬儀業界の戦後史——葬祭事業から見える死のリアリティ——』青弓社。
- 中牧弘允1984「葬儀習俗における伝統と変容——北海道常呂町の事例を中心に——」竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会編『宗教文化の諸相』山喜房仏書林、553-566頁。
- 林英一2010『近代火葬の民俗学』法蔵館。
- 村上興匡1990「大正期東京における葬送儀礼の変化と近代化」『宗教研究』64(1)、37-61頁。
- 村上興匡1991a「都市化・近代化と葬送儀礼の変容1——地域の都市化と葬祭業務」『SOGI』4、105-109頁。
- 村上興匡1991b「都市化・近代化と葬送儀礼の変容2——村の人間関係と土葬葬儀」『SOGI』5、105-109頁。
- 村上興匡1991c「都市化・近代化と葬送儀礼の変容3——葬儀の都市化とその意味」『SOGI』6、95-100頁。
- 村上興匡1997「葬儀執行者の変遷と死の意味づけの変化」浄土宗総合研究所・伊藤唯真・藤井正雄編『葬祭仏教——その歴史と現代的課題——』ノンブル、97-122頁。
- 村上興匡2001「近代葬祭業の成立と葬儀慣習の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』91、137-149頁。
- 村上興匡2003「葬祭の個人化と意識の変容——各種アンケート調査をもとにして——」『死生学研究』1、341-362頁。
- 村上興匡2006「都市葬祭業の展開と葬儀意識の変化」『東京大学宗教学年報』23、9-22頁。
- 村上興匡2018「葬儀研究からみた弔いの意味づけの変化」鈴木岩弓・森謙二編『現代日本の葬送と墓制——イエ亡き時代の死者のゆくえ——』吉川弘文館、131-148頁。

森謙二2000『墓と葬送の現在』東京堂出版。

森謙二2014『墓と葬送のゆくえ』吉川弘文館。

柳田国男2001（1929）「葬制の沿革について」『柳田国男全集』28、筑摩書房、94-111頁。

山田慎也1995「葬制の変化と地域社会——和歌山県東牟婁郡古座町の事例を通して——」『日本民俗学』203、23-59頁。

山田慎也1996「死を受容させるもの——輿から祭壇へ——」『日本民俗学』207、29-57頁。

山田慎也1999「葬祭業者を利用することとは——互助から契約へ——」新谷尚紀編『講座人間と環境9 死後の環境——他界への準備と墓——』昭和堂、100-125頁。

山田慎也2006「日本における葬制研究の展開——近代化による変容を中心に——」東京都立大学社会人類学会編『社会人類学年報』32、弘文堂、165-182頁。

山田慎也2007『現代日本の死と葬儀——葬祭業の展開と死生観の変容——』東京大学出版会。